

自ら考え、工夫し、伝え合う力を育む保育

1 保育で願う豊かな学びの姿

本園では、子どもたちが周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、自分の遊びに必要な物を見つけ、遊びに取り入れいかそうとしたり、友だちとやりとりし、互いの思いや考えを受けとめたりしながら、遊びを追求していこうとする力(心情・意欲・態度)を身につけてほしいと願っている。そこで私たちは、子どもが主体的に展開していく活動を通して求める豊かな学びの姿を、以下のように考えた。

- 興味・関心をもち、主体的に環境に関わって、疑問や不思議さに出会う姿
- 試行錯誤しながら気づいたり、考えたり、工夫したり、確かめたりする姿
- 自ら見つけたこと・考えたことを言葉で伝え合うことを通して、自分の遊びに目的や課題意識をもって取り組もうとする姿
- 友だちと同じ目的を共有して考えを出し合ったり、相手の考えのよさを受け入れ合ったりしながら協同して実現しようとする姿

以下は年長5歳児がバッタと関わった記録の一部である。みつけた遊びと学級での活動を繰り返す中で、今まで虫に興味を示さなかった子どもたちも様々な体験を通して気づき、学んでいく姿が見られた。実践事例「バッタさん、げんきでね。」(5歳児) ☆は教師の意図的な環境の構成とはたらきかけを示す。

7月に入りバッタが少し大きくなってくると、虫好きの子どもたちだけでなく、今まで興味を示さなかった子どもたちも少しずつバッタに興味をもって関わるようになってきた。このような子どもたちの興味をより具体的なものにするため、7月13日 教師が園庭マップを作製した(☆1)。子どもたちがそこに、みんなに伝えたい「いいもの」を描きこんだところ、そのほとんどは虫がたくさんいる場所であり、この日からバッタ捕りがさらに盛んになった。

7月15日「あれー？色が違うバッタがいるよ。」と、今まで気に留めなかったことに改めて疑問を感じた園児A。教師は「本当だ、違うよ。なんでだろうね。」と疑問を投げかけた(☆2)。「茶色いバッタは土の上のかくれんぼが上手なんじゃないの？緑のバッタは草の中のかくれんぼが上手なんだよ。」と言う園児Aに対し、「茶色いバッタが草の上にいるら緑色になっていったんだよ。」と言う園児Bの推測を大切に、その場にいたみんなで、もう1度バッタを探して確認し図鑑で調べた。

学級全員での伝え合いの場(☆3)では、「茶色い方が小さいから赤ちゃんで、緑の方がお母さんなんじゃない？お母さんの方が大きいから。」「茶色が雄で緑が雌。茶色の方が雄っぽい色だから。」「茶色が雌で緑が雄。緑が大きいから。」と様々な考えを言葉で伝える姿が見られた。他にも、バッタが草を食べる音に気づいた園児Cが、草を食べる様子を真似し、その横で園児Aもバッタになって飛ぶ等、バッタの様子を身体で表現する動きも出てきた。その後、みんなでバッタがたくさんいる場所に行くと、今までバッタに触ったことなかった園児Dもバッタを捕まえようと追いかけて始めた。園児Dは自分でバッタを捕まえることはできなかったが、手のひらに乗せてもらったバッタをつぶれないようにそっと掴み、大事そうにケースに入れて家に持って帰った。

翌日以降も、園児D、E、F、Gが棲みかを作ったり、なぜバッタの色が違うのかを家で調べ、園児Hが分かったことを園庭マップに貼ったり、19日に園児Cが脱皮を発見したりと、様々な気づきが見られた。また、7月初旬に網を使っていた子どもたちは、10日頃より素手でバッタを捕ることができるようになり、バッタをつぶさないように捕る時の手の形を変えていき、バッタの体のどこを持つと優しく捕まえることができるのかを考えるようになってきた。

また、子どもたちは、飼育ケースに入れていた草が、週明けにはほとんど無くなることを見て、バッタが多量の草を食べることを知った。7月20日 長い夏休みにはバッタがお腹をすかせてしまうということをみんなで話し合っ、学級のバッタを園庭に放すことになり、「2学期にまた遊ぼうね。」と言いながらバッタとさよならをすることができた。

以上の記録から次の経験や学びをとらえることができる。

7月初旬から終業式（20日）までの一連の活動の過程の中で、子どもたちはバッタが大きくなってきたことに気づき、自ら興味をもってバッタに関わり、今まで誰も気にすることのなかった疑問に出会った。そして、発見したことや疑問に対しての考えを伝え合ったことで興味が深まり、バッタを捕まえることや飼うこと、バッタの変化への疑問に対しての答えを知ること等、それぞれの意識や目的をもって遊びに向かっていった。その過程で、採集したバッタが生きていけるようにするための棲みかを作り、草を入れ替えて、しだいにバッタに対しての思いやりをもちながら世話をすることができた。この経験が、バッタを捕まえる手の形の変化や、夏休み中どのような状態にするのがバッタにとって一番いいのかと考えたり、自分の考えを出し合い話し合ったことにつながっていったのだと考える。

2 昨年度までの研究の経緯

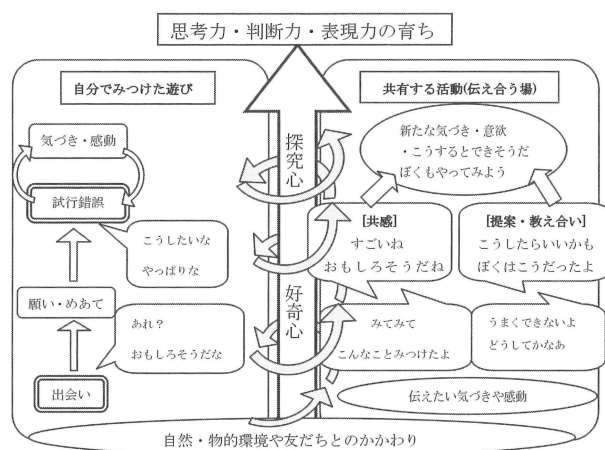
(1) 保育における思考力・判断力・表現力

幼児期においては遊びや生活の場面で、思考をする前に行動する姿や、思考・判断が同時に行動として表されたり繰り返されたりする姿等、未分化な姿が表れる。そのため思考力・判断力を、相互に作用する力として、次のようにとらえることとした。これらの力は相互にはたらき合っており、切り離せないものである。また体験そのものの中で、これらの力を育てることが豊かな学びの姿へとつながり、小学校・中学校での各教科や領域における思考力・判断力・表現力の基礎となると考える。

○思考力・判断力 … 自ら興味をもって環境にかかわり、驚きや疑問をもって考え、試したり確かめたり工夫したりする力

○表現力 … 感じたことや考えたことを自分なりの方法で表したり言葉で伝え合ったりする力

右の図は、保育における思考力・判断力・表現力の育ちの過程をイメージしたものである。思考力・判断力・表現力は、自然・物的環境や友だちとのかかわりを通して、発見したことや不思議に思ったことなどに対し、好奇心や探究心をもって、思いを実現していこうとする中で育っていくと考える。さらにその過程で、願いやめあてをもつこと、気づきや感動をもって試行錯誤すること、友だちに伝えたり共感したり興味や活動を共有したりすることで、より育っていくのではないかと考えた。そこで、子どもが思いを実現していけるよう、教師がどのようににはたらきかければよいのかを探ってきた。



その結果、一人ひとりとの信頼関係を築くと共に、子ども同士の間でかかわりを広げ深めていくこと、子どもの意欲的な姿を認めていくこと、子どもの素朴な発想や考え・工夫を価値づけること、これらのはたらきかけを活動の状況に応じて意識的に行うことが、次のような子どもの姿につながることが分かってきた。

○教師や仲のよい友だちと一緒にいることで、子どもは安心して自分の思いや考えを表現する。

○自分の発想や考えに自信をもつことで、くじけずにめあてに向かってやりとげようとする。

○友だちと活動を共有していく楽しさや達成感を味わうことで、遊びを継続し追求していこうとする。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

平成22昨年度は、一人ひとりの経験や考え・発見したことを、伝え合い、友だちと共有することにより、さらに豊かな経験や学びとして深めていくことを研究の目的にした。そこで、子どもたちが「このことをみんなに伝えたい」と心を動かす体験ができるよう、「自分でみつけた遊び」の充実を図りながら、伝え合う場の構成の仕方について研究を進めた。共有する場をもつタイミングや時間の長さ、とりあげる話題、隊形等を工夫し、子どもたちの思いをつなぐことを意識してはたらきかけた。具体的には、実物や絵・写真を用いての可視化を必要に応じて取り入れることが、話し合いを深めることに有効であっ

たとえる。特にその遊びに参加していなかった子どもの興味を引きつける場合や、言葉だけでは伝わりにくい場合、数日前のことを思い出させる場合において、可視化することで、みんなが共通のイメージをもつことができるからである。これは伝え合いの場での話の広がりだけでなく、その後の遊びの持続、発展にもつながった。特に年長児においては、「どうしてだろうね。」「なんでそう思う？」等、子どもたちの疑問や考えを引き出し、「それは～ということ？」「～したらどうなるんだろう？」と考えを整理・追求させていくような声かけをすることも、遊びの持続、発展のために有効であった。

しかし、伝え合う場の構成の仕方については課題も残った。各学年の発達段階を考慮した伝え合う場の設定の仕方、話題の精選、さらに、一人ひとりの興味や関心の違いに応じて、どのような場の設定や個別的なはたらきかけをすればよいのかを考えていくことが必要であることが分かった。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力を育てるための「伝え合う場」づくり

昨年度までの研究で明らかになったことや課題をもとに、今年度は伝え合う場の構成の仕方について、さらに追求していく。しかし、それは単に高度な表現や話し合いを求めるということではない。子どもの実態に即し、状況に応じて場を設定する必要がある。そのため、今年度は「各学年の発達段階を考慮した、心情・意欲・態度を育む伝え合う場」、「子どもの興味・関心の違いによって生まれる経験や学びの内容の違いを取り入れた伝え合う場」を視点を研究をすすめることにした。

①各学年の発達段階を考慮した、心情・意欲・態度を育む伝え合う場

幼児はそれまでの経験により、一人ひとりの発達が大きく異なる。そのため、個々の発達の違いを考慮する必要はあるが、学級全員がいる場で子どもが思いを表現するまでに、大まかに次のようなステップがあると考ええる。

(i) 教師に対して親しみをもち自分の思いを出せるようになる。

(ii) 遊びの中で少人数でのやりとりがあり、思いを伝えることのできる相手が次第に増え、特定の友だちの前で自分の思いを出せるようになる。

(iii) このことをみんなに伝えたいという思いをもち、学級全員がいる場で思いを出せるようになる。

学級全員がいる場で思いを表現するようになってからも、最初は教師対子どものやりとりである。その後、自分の思いをみんなに伝えることができるようになって、すぐに伝え合いとはならない。

自分の思いを学級のみんなに伝えるためには、言葉で表現する力だけではなく、みんなに伝えたいという思いが必要である。そこで学級全体での伝え合いの素地として、学級のみんなと触れ合うこと、みんなと一緒にしたという思いを大事に育む環境を構成する。主な配慮事項を次のように考える。

4 歳児

- ・自分で思いを伝えたいという気持ちを尊重し見守ったり、安心できるよう子どもに触れたりする。
- ・子どもが思いを言葉に表すことができにくい場合、教師が代弁したり適切な言葉を教えたりする。
- ・話が伝わりにくい場合、言葉をつけたしたり分かりやすい言葉に言い換えたりする。
- ・見つけたこと、できたことを、子ども自身が本当に思いを伝えたい相手に、その時にすぐ伝えられるよう、適機にその場所で周りの子どもに伝える場をもつ。

5 歳児

- ・子どもが何を考え何を願っているのかを適切に見とり、必要に応じて言葉をかける。
- ・過去の経験がヒントとなるような質問をしたり、一緒に考え、問題点に気づかせたりと、思考の筋道を立てる手助けとなるように配慮し、できるだけ子どもの力で願いを実現できるようにしていく。
- ・みつけた遊びの中で出てきた、学級のみんなに伝えたいことや相談したいことを共有していく。

②子どもの興味・関心の違いによって生まれる経験や学びの内容の違いを取り入れた伝え合う場

遊びが複数見られる場合、それぞれの遊びによって当然学びの内容は違う。しかし、同じ遊びをし、同じ経験をしていても、興味・関心の違いにより、それぞれの子どもが学ぶ内容は違ってくる。伝え合う場では、ともすれば言動にそつがない子どもの意見を取り上げたり、いつも同じ子どもたちが意見を

言ったりという状態になりがちであるが、個々の子どもの独自の経験をいかした伝え合う場を意識することで、子どもたちは多様な考え方に触れることができる。さらに、素朴な発見や気づきを言葉で表そうとする姿を認めていくことで、その言葉に立ち止まり思考が深まっていくと考える。また、これは自分とは違う友だちの感じ方や思いを受け入れ認めることにもつながっていく。そのためには、多くの子どもが伝え合う場に参加していけるよう、自発的に表現することをためらっている子どもにも声をかけていくことや、できなくて困っていること、解決できなかったトラブル等の様々な話題を取り上げていくことが必要である。しかし、ここでいう様々な話題を取り上げるとは、単に子どもたちが取り組んだ活動を数多く取り上げるということではない。「新しいことや難しいことにも挑戦する」「相手の気持ちを考えて行動する」といった、子どもたちに経験させたいことがらや心情・意欲・態度に目を向けるということである。このことが、子どもたちのしていた遊びが異なっていたとしても学級全員で共有することではないだろうか。教師が意図的に紹介し、はたらきかけることで、自分が経験していないことでも、友だちの喜びや悲しい気持ち等を押し量り、自分のことに置き換えて考えることにつながる。

(2) 思考力・判断力・表現力の「見とりと価値づけの観点（心情・意欲・態度）」と保育における評価

一人ひとりの幼児の発達に対する理解を前提として保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることを、保育における評価として考えている。また幼稚園では、一人ひとりの子どもに応じたかわり方をし、援助の在り方も個々の必要に応じていくことを大切にしている。遊びが違う場合はもちろん、一見同じような活動をしているようでも、その活動が一人ひとりの幼児の発達にとって、違った意味をもっているからである。これらを踏まえ、評価をいかして次の学び合いをよりよいものにするという今年度の本研究の取り組みを考えたとき、各教科で使われる「評価」という観点とは異なり、保育では子どもの姿に対して「見とりと価値づけの観点」という語を使う方がふさわしいと考えた。

保育では、一人ひとりの子どもの発達の特性や興味・関心に合わせた、ふさわしい援助の在り方を求めることから、「見とりと価値づけの観点」はそれぞれの遊びや活動において5領域の総合的な視野に立って表記することが適切である。期(子どもの成長・発達のすじみちの節目節目に目を向けて、その前後とは異なった特徴をもった一定期間)における生活の構想をするときには、教育課程をベースとし、「見とりと価値づけの観点」をもって、ねらいや内容、環境の構成等を考えていく。今回はより分かりやすくするため、「予想される生活の展開」の中に、それぞれの遊びや活動で予想される子どもの姿を具体的に挙げ、特に思考力・判断力・表現力の育ちにかかわる姿に印を表記する。教師は、子どもの話したことや表現、遊びへ向かう姿等、特に子どもの変容をとらえて、文章によって記録している。そして、教師のはたらきかけや友だちの影響、自然や家庭の環境の変化等、子どもの変容の理由が何によるものなのか、教師のはたらきかけは適切であったのか、記録を基に考察する。加えて、個々の子どもの成長の過程や発達の課題を踏まえ、次の援助の在り方を見えるように工夫している。

4 成果と課題

伝えるということに関して、発達の違いに視点を置いたことで、普段の遊びや生活の中で素直な思いを出すことが、話すこと、伝え合うことへとつながっていくと実感できた。伝え合いの場では、伝え合うだけでなく、友だちの体験や思いを共有することが、子どもたちの遊びを広げるということにとどまらず、新しい願いや追求心を生み出すきっかけにもなった。また、思考力・判断力・表現力に視点を置いて考えてきた伝え合う場が、互いの個性を知り人間関係を広げる伝え合う場ともなった。互いのことを知ろうとする気持ちが、人の話を聞こうとする姿へとつながり、それがより深い伝え合いへとつながっていくのではないだろうか。教師が適切なはたらきかけをするためには、まず子どもをどう見とるかということが重要となる。遊びや会話の内容を把握すると共に、子どものどのような思いが姿となって表れているかを推測するために、個々の子ども特有の感じ方や言葉の使い方、園外での生活の様子等も知っておく必要がある。また、子どもたちが心から「やってみたい」と思い、遊びを追求していけるような環境の構成について、さらに研究をすすめていきたい。

(文責 内田 祐)